

# 華の公方

鷹樹烏介

「<sup>ざるめんかじゃ</sup>猿面冠者とは、よう言うたものよ」

面談した人物——豊臣秀吉——の顔を思い出して、目元涼しく長身で貴公子然とした若者が吐き捨てるようつぶやいた。

白馬に騎乗していた。この馬は毛並みが良く一見して<sup>しゅんめ</sup>駿馬とわかる。秀吉から上洛の慰労の印として下賜されたものだ。この典雅な若者にはお似合いであった。

若者は<sup>あしかがくにとも</sup>足利国朝。関東に<sup>ばんきよ</sup>蟠踞した足利將軍家の<sup>まつえい</sup>末裔「<sup>こが</sup>古河公方」の傍流「<sup>おゆみ</sup>小弓公方」の嫡男である。

戦とも思えぬ包囲戦で、天下の名城である小田原城が豊臣秀吉の手によって落城し、<sup>ひのもと</sup>日ノ本の<sup>すうせい</sup>趨勢は決した。

国朝が数人の供回りで、豊臣秀吉のもとに上洛したのは、彼の姉が秀吉の側室になっていたからだ。

その、縁を頼ったのは勝ち馬に乗るため、ようするに天下人まで王手をかけた人物への媚びへつらいだ。国朝の<sup>じくじ</sup>忸怩たる思いはそこにある。

出自も定かではない豊臣だの徳川だのといった輩が世を治めることになるのだろう。

その天下人に王手をかけた秀吉は、自らが築き上げた権力を、一族に継承させるために<sup>きゅうきゅう</sup>汲々としている。

目下、秀吉が仮想敵としているのは、徳川家康であろうことは、里見家の<sup>ひご</sup>庇護を受けて<sup>ひっそく</sup>逼塞していた国朝にもわかった。

秀吉が猫撫で声で、清和源氏の血を引く足利にすり寄ったのは、家康への<sup>けんせい</sup>牽制。

関東に家康を追いやるだけでは気が済まず、さらに別の権威を置くことで、家康の関東支配を邪魔しようというさもしい魂胆だ。

その家康も「源氏の<sup>すえ</sup>裔である」と大嘘をついており、その嘘に権威を付けるために足利に秋波を送ってきている。自分の陣営に国朝を取り込みたくて、今まで洩もひっかけなかったくせに、下にも置かぬ歓待をする始末である。

「卑しき者ども。我らを利用することしか考えておらぬ」

国朝の父・<sup>よりずみ</sup>頼純はこうした権力者同士の「力の天秤」に目を付け、うまく立ち回ったと言える。男子が無く断絶の危機を迎えていた国朝らの本家筋にあたる古河公方の<sup>うじひめ</sup>氏姫と、国朝の婚儀を秀吉に仲介させたのは妙手であった。

頼純は家督争いで古河公方から分裂した小弓公方が、本家を乗っ取った形にもっていったわけだ。

念願の所領も確保できた。わずか四百貫の所領であるが、「公方様を庇護している」という肩書が欲しいだけで頼純・国朝親子を飼い殺ししている里見家から、独立することができる。

「古河の方々は不満であろうな」

侮っていた分家に屈する形だ。敵同士であったとはいえ、同じ足利の血筋。同情の念があった。

白馬に跨ったまま、国朝が物思いにふけりながら、鎌倉街道の武蔵大路<sup>むさしおおじ</sup>を往く。

街道沿いの農民が、馬上にある白皙<sup>はくせき</sup>の貴公子をやんごとない方だと思って、農作業の手を止めて頭を垂れた。

はるか上空で、鳶<sup>とび</sup>がピーヒョロと鳴きながら、円を描いて飛んでいた。

○

喜連川<sup>きつれがわ</sup>という新しい所領を受け取るにあたり、家臣団を作らねばならないが、それが国朝にとって頭痛の種であった。

城はある。鎌倉の昔より、この地を治めてきた塩谷<sup>しおのや</sup>一族の喜連川城がそれだ。

国朝の姉、嶋子<sup>しまこ</sup>の最初の嫁ぎ先である塩谷家は、秀吉の小田原攻めに遅参したことで改易の憂き目に遭っている。仕置きを恐れた第十七代当主・塩谷惟久<sup>しおのやこれひさ</sup>は、妻である嶋子を置き去りにしてどこかに逃げるといふ醜態をさらしていた。

嶋子は、女だてらに、秀吉軍への投降の残務処理をしていたのを見初められて、秀吉の側室にあがることになるが、これが頼純・国朝の運を拓く契機となった。

その喜連川城をそのまま使わせてもらうことになっている。

国朝の父・頼純は、秀吉・家康という、戦国の巨人どもとの交渉ですっかり心身をすり減らしてしまっていて、国朝に家督を譲るとして、表舞台にでてくることを拒んでいる。

若くして家督を継いだ国朝の双肩に新領地経営の重圧がかかっていた。

里見の厄介者として逼塞していた国朝には、子飼いの家臣というものがない。

国朝の祖父・義明<sup>よしあき</sup>の代には一騎当千の兵がいたが、『国府台合戦』で義明とともに討ち死にしていた。

急ごしらえの家臣団は、今まで庇護していた里見家から派遣されてきた者、渋々ながら合流した古河公方から派遣されてきた者、どこから来たのかとんと覚えのない者の三種類しかない。

なんとか、四十人余の家臣団を仕立てることができたが、一色、高、山名、石塔、逸見、梶原、椎津など、足利の祖・尊氏公<sup>くつわ</sup>と轡<sup>くつわ</sup>を並べて戦い『太平記』にも載っている名家の末裔が特に鬱陶しい。没落しているくせに、誇りばかりが高いのだ。

「彼らの気持ちは、分からぬでもない」

国朝も同じ境遇である。

小弓公方の本家筋にあたる古河公方の家臣であった彼らは、国朝を「分家の倅<sup>せがれ</sup>」と軽んじる傾向があり、里見家から派遣されてきた連中を「陪臣の輩」と下に見ている。

当然、上手くいくはずはない。

里見側にしても、新たに生まれた利権になんとしても喰いつくよう、派遣元から言い含められていて、国朝より里見の方に顔を向けていた。

皮肉なことに「このような者がおったのか？」という、どこから合流していたのかわからない人物しか信用できない事態になっている。

国朝の近侍として仕える者に武田一郎右衛門<sup>いちろう えもん</sup>という人物がいた。

古河公方系・里見系と、真っ二つに割れていがみ合うなか、我関せずという態度を貫き、自分の役割は「国朝様の護衛」と割り切っている風がある。

年齢も国朝に近い。

「はて？ だれであったか？」

という国朝の問いに、

「祖父が、義明様の軍勢に加わっておりました。義明様ご不幸の後、しばらく諸国を廻っておりましたが、父の遺言で国朝様にお仕えするよう指示され、柴田佐兵衛<sup>さべえ</sup>さまのご推挙で、家臣団末席に加わっております」

と、すらすらと答えている。柴田佐兵衛は古河公方系の家臣・柴田久右衛門<sup>きゅう えもん</sup>の叔父にあたる人物だが、すでに病没していた。

結局、出自がよくわからない人物なのであるが、国朝の護衛に立候補するだけの剣の腕はあった。最新の技術である「居合抜刀術」の名手なのであった。

抜きつけの一刀で飛来する矢を斬り飛ばすという演武で、護衛就任を決めている。

影のように付き添いながら、余計な口を挟まないのも、煩い古老どもにうんざりしている国朝が気に入っている点だ。

世情に疎い国朝に、様々な情報を耳に入れるのも諸国を廻っていた武田一郎右衛門の役目だった。

国朝と一郎右衛門の間には、友情めいたものが育まれつつあった。

○

国朝と氏姫の婚礼は無事に終わったが、氏姫は頑として古河公方に残された最後の所領である鴻巣御所<sup>こうのすごしよ</sup>から動かず、喜連川には足を踏み入れようとしない。

結婚と同時に別居という困った状態になったが、家臣団の過半数を占めているのが、その氏姫から派遣されている古河公方系である。

当の国朝も氏姫に同情的ということもあり「仕方あるまい」という空気が醸成されていた。

新所領の運営開始で、それどころではない……ということもあった。

情けない末路とはいえ、鎌倉の昔から十七代にわたって塩谷一族が治めていた土地である。塩谷家臣から帰農した武士もいて、それが反抗的な態度をとっている。

国朝が若いので侮るということもあっただろう。彼らの慰撫<sup>いぶ</sup>が新領地経営の主たる課題であった。

一色ら古河公方系の古老は、

「田舎侍ども、いずれ足利家の威風に屈するでありますよう」

と息巻いているが、国朝は祖父がそれを過信したがゆえに失策を犯して討たれたのを知っているので、柔軟だった。

「要するに、彼らは怖いのだ。主に置いてきぼりにされ、新領主のことも知らぬ。ならば、安堵させればよい」

格式が、身分の差が、と煩い家臣団を黙らせ、国朝は領内を巡察した。

その過程で、土地の者と気さくに話をし、笑い、茶菓を楽しむ。

その傍らには常に一郎右衛門がおり、隙なく護衛していた。

国朝の不思議なところは、警戒心や猜疑心に凝り固まった相手を、いつの間にかときほぐしてしまうことだった。

豊臣秀吉のような、計算された「人誑<sup>ひとたら</sup>し」とは違う。普通に会話しているだけで、相手は国朝に自然と好感をもってしまうのだ。

災禍の種になりそうな、不平分子は、あっという間に国朝支持にまわり、新領地受け取りに伴う血なまぐさい事案の発生を免れていた。これは、稀有なことである。

「驚きました」

土地の者に招かれての会合の帰り道、ぽつんと護衛の一郎右衛門がつぶやく。

「何がだ？」

ふるまい酒で、頬に朱を刷いている国朝が聞き返す。

「何やら、まじない事でもしたかのように、誰もが国朝様にコロリと参ってしまうことです」

「普通に話しているだけだ。なにも特別なことはしておらぬ」

「それは存じております。知っていてなお、不思議なのです。まるで神仏に守られているような……」

相変わらず氏姫との別居は続いているが、喜連川は平穏そのもので、新領地運営は順調だった。北条の残党の「風魔<sup>ふうま</sup>」が関東で暴れまわっているらしいが、ここまでは足を延ばしていない。まるで本当に神仏の加護があるかのようだった。

「やっと得た所領じゃ。無くさぬよう下地を作るのが、私の役目。一郎右衛門、これは直感だが、喜連川の足利家は長く続くような気がする」

「私もそう思います。ですが、毒見もせずに、出されたものを口にするのはやめて頂きたい」

「馬鹿を申せ。土地のものを土地の者と一緒に食べる。これに勝る交流はないぞ」

○

老いが目立ち始めた顔を<sup>ひそ</sup>顰めて、家康が書状に目を落としていた。ようやく雨漏りの補修が終わったばかりの江戸城の中である。

北条討伐が終わり、奥羽仕置も一段落し、北条征伐の段取りに奔走した家康を待っていたのは、三河、遠江、<sup>とおとうみ</sup>駿河という本拠地から北条亡きあとの関東への国替えだった。

奥羽の不穏に備える……という理屈だが、豊臣秀吉の嫌がらせである。

血の気が多い三河武士たちは憤激したが、表向き家康は飄々としたものだった。

「倍以上の加増じゃ。喜べ」

と家臣をなだめた。石高は百二十五万石から二百五十万石となる。

だが、内心腸が煮えくり返っており、染めて誤魔化してはいるがめっきり白髪も増えてしまった。この時期に「老い」を家臣団に見せるわけにはいかない。

「なにが加増か。四公六民の低い税率。北条の残党も暴れまわっておる。頭の痛い事よ」

小声でつぶやきながら、家康の真向かいに座る痩せた男に、今まで見ていた書状を見せる。

この、家康と同年代の男は<sup>ほんだまさのぶ</sup>本多正信。家康の参謀として近侍している人物であった。

「上手く、国朝の懷に入ったようすな」

書状を一瞥しただけで、正信は家康にそれを返す。

「小弓公方の小倅、予想に反して出来星であった。念のため、武田一郎右衛門を潜り込ませておいて正解であったわ」

家康が薄く笑ったが、その目は昏い。盆の湯呑に手を伸ばして、醒めた褐色の茶を一気に飲み干す。家康の眉間に深いしわが刻まれ、ため息が漏れた。

「まずい」

「漢方などやめて、酒にきなされ」

正信が呆れたような声で言う。

「猿面冠者より先に死ねぬ。ここからは、寿命との戦いよ。苦い薬も飲もうぞ」

薬臭いげつぷをしながら、家康が答えた。

「やはり、御曹司ではダメですか？」

正信が言う御曹司とは、家康の跡取りと目されている元服したばかりの秀忠のことである。

「ダメだな。あやつには『華<sup>はな</sup>』がない」

「はあ……『華』ですか？ 美男ということなら、御曹司もなかなかですが？」

家康が口直しの白湯をすすりながら言う。

「見目麗しいだけではダメだ。言葉では表しにくいが、自然と敬ってしまう空気とでも言おうか？ 我々のような卑しい出自では到達できぬ『磨かれた血』ではないと無理な境地よ」

「それが国朝にはあると？」

「あるな。密偵の一郎右衛門ですら、誑されかけておる。半蔵配下の忍だぞ、あやつは」

正信がその言葉を聞いて、瞑目する。考えている時の彼の癖だった。

「関八州支配の邪魔。消えて頂きますか？」

しばしの黙考のあと、正信がさらっと恐ろしいことを口にする。

「それも考えたが、最後の手段だ。それより、利用するが吉だな」

「素案をお聞かせいただけますか？」

家康が扇子で畳の上に日本地図を書く。実際には形をなぞっただけだが、正信の脳裏には日本地図が浮かんでいた。

「猿面冠者は、大名どもの力を削ぐために、海外に出兵を計画しておる。西国大名に先ずは動員がかかるはず。やがて関東にも届く」

扇子がトンと九州の位置を差した。

「わしは、『国替えしたばかり』を理由に出兵は断る。三・遠・駿を無理やり取り上げたばかり。これ以上の横車は押してこないだろう」

なるほどと、正信が頷いた。

「そこでだ、関東の総代表として、喜連川を担ぎ上げる。小国とはいえ、家柄は申し分ない。路銀はないだろうから、わしが出す。身代わり代というなら安いものよ」

「喜連川に恩も売れますな」

「そうだ。清和源氏の血を引くお方に、恩を売るのは重要なことだ」

もちろん、それだけではないのでありましょう？ と言いたげに、正信が上目遣いに家康を見た。家康は嫌な笑みを浮かべた。

「一郎右衛門の報告書に、猿面冠者の密偵の報告がない。古河公方と小弓公方を和解させたことで、完結してしまっているのだ。古臭い権威など、自分の権勢と比べれば、いかほどのモノかと考えておるのだろう」

「源平の昔から、西の連中は坂東<sup>ばんとう</sup>を侮っておりますからな」

「それよ」

そう言って、トントントンと畳の上の何点かを差す。

正信の脳裏の日本地図だと、全て関八州の交通の要衝だった。

「各所に『鎌倉公方様ご出陣』と触れを出せ。篤志家に化けた商人を配して、金もばらまけ。京を過ぎるころには、どれほどの軍勢に膨れ上がっておろうな？」

「猿めが、腰を抜かしましょう。ですが、国朝様に危険が及ぶのでは？」

「大坂から離れたところ……、そうさな、安芸あたりで、仕掛けるやもしれぬ。いずれにせよ、当方にはかかわりなきこと」

「ですな。『華』がある人物は、早めの退場がよろしいかと」



国朝の元に、秀吉から出兵の依頼が来た。

他の大名へは、命令であるにもかかわらず、喜連川には丁重な出馬の依頼である。

領地運営ははじまったばかりで、金銭的な余裕はなかったが、そこは奥州への備えとして、江戸に残留する家康が寄付を申し出ていた。

貧窮した大名には、秀吉によって禁止されている「貸付」を行っている家康だが、国朝には「寄進」である。破格の扱いだった。おかげで、軍備と路銀は十分となった。

鴻巣御所の氏姫からは、軍旗が届けられた。長さ七尺二分、幅四尺一分、白錦に金箔で日輪があしらわれ、黒墨で五三桐が描かれている。

これは古河公方の有力武將に特別に与えられる特別な軍旗で、別居中である氏姫なりの応援の証であったのだろう。

軍勢はかき集めて二百あまり。輜重隊<sup>しちょう</sup>を含めても三百に満たなかった。

喜連川を治めて一年余。兵を養うまでには至っていない。

「いかがいたしましょうや？」

筆頭家老の<sup>たかさだ</sup>一色崇貞が軍備に忙殺されて疲労が滲む顔に汗を光らせながら言う。

「今できることをやって、出立すればよい。幸いにして、路銀は十分。ゆるゆると参ろう」

家康の寄進のことを聞きつけ、秀吉も寄進を申し出ていた。それほどまでに、清和源氏の末流の権威が欲しいのであろう。

国朝が崇貞と参陣の経路や陣屋の手配を話し合っていると、慌てて駆け込んできたのは高氏師だった。

「塩谷の残党どもが、門前に押し寄せております！」

喜連川の統治を始めるにあたり、国朝が気を配っていたのは、前領主である塩谷惟久に見捨てられて帰農した塩谷の旧家臣団だった。妻の嶋子さえ放り捨てて逃げた人物である。家臣への配慮などない。

「私に対応に出よう。なに、ほとんどの者が、顔見知りである」

領内を巡察していた経験が、試される時だ。

「そんな、国朝様自ら……」

一色崇貞が渋面を作って苦言を呈する。

国朝はひらりと笑って、

「ここを本拠と定めたからは、地元民との争いはさけない。まあ、まかせておけ」

と言いついて、平服の直垂姿のまま、喜連川城の大手門に向かった。

「武装しているとのことではありますが、戦の気配はありませんな」

影のように付き従っている武田一郎右衛門が、ぼそっと国朝に助言する。

一郎右衛門の配下には偵察に優れた者が多くいて、国朝の耳目となっていた。

「首領は矢板友成<sup>ともなり</sup>か？」

「左様でございます」

矢板友成は塩谷惟久の有力武将の一人だったが、嶋子同様、置き去りにされた人物だった。

嶋子を助けて残務処理にあたった後は、刀を捨てて喜連川の郷土となっていた。同じ様に帰農した元・塩谷家臣団のまとめ役でもあった。

「なら、大事にはならぬだろう。どれ、話を聞くか」

大手門に国朝が姿を見せると、甲冑姿の郷土たちが五十人ほど居並んでいた。

戦意がないことを示すために槍は伏せ、旗指物もない。

「何事か？」

武者どもを前に、怯むことなく、まるで天気の話でも尋ねるかのような口調で国朝が言う。口元には微笑すら<sup>たた</sup>湛えて。

一歩前に進み出たのは、いかにも実直そうな壮年の男、矢板友成であった。傍らには幼子を連れている。

友成が膝を屈して拝謁の姿勢をとると、幼子も友成を真似た。

背後の武者どもも、一斉に膝を屈する。ガチャガチャと甲冑が鳴った。

「国朝様、ご出征と仄聞いたします。我ら塩谷党、恥辱にまみれておりますが、お供の端に加えていただき、槍働きで汚名を雪ぐ機会をお与えくださいますよう、お願いにまかり越しました」

彼ら一人一人に数人の郎党が加わることを考えると、国朝の軍勢は一気に倍に膨れ上がる。幸いにして、路銀は余るほどある。喜連川領内の結束を図る上でも、国朝にとって悪い話ではなかった。

「これなるは一子、宇佐丸にございます。妻に先立たれ、家僕は老いておりますので、私が面倒を見ておりました。城内にて、お預かりください」

ようするに、友成は自分の子を人質に差し出すと言っているのだ。よほどの覚悟であらう。

「よう言うてくださった。心強いぞ」

国朝が快諾すると、一同が平伏した。国朝が自ら領内を巡察した苦勞が結実した瞬間である。

当主が逃亡したことで、塩谷党も忸怩たる思いでいたのだろう。声を殺して泣く者もいた。

○

陣容、路銀と順調に整い、<sup>ぼく</sup>朴によって吉日を選び、出陣となった。

出陣に先立ち、十三歳となった弟の龍王丸が元服して<sup>よりうじ</sup>頼氏と名乗っている。

「兄上、私も行きとうございました」

氏姫より下賜された軍旗に合わせて、特別に仕立てた<sup>しろいとおどし</sup>白糸緘の甲冑姿を惚れぼれと見ながら頼氏が口を尖らせる。

「九州までの長旅。加えて海を渡っての戦じゃ。血族を本領に残すのは、武士の習いであろう。しっかりと留守をたのんだぞ」

国朝が<sup>す</sup>拗ねる弟の肩を叩いて、苦笑する。

塩谷党が加わったことで、留守中の城の守兵には余裕が出来た。守将となる頼氏の後見には父の頼純が隠居所から出てきてくれて、国朝にとって心強い。後顧の憂いはなかった。

秀吉、家康の寄進により、軍資金は潤沢で、甲冑を揃えることが出来ていた。

赤い甲冑でそろえる「赤備え」などの習慣があるが、あれは目立つことで勇猛さを誇るというほかに、家臣に甲冑を与えるほど資金力があるというのを示す側面もある。

国朝はそれに習った。国朝の兜は日輪の前立て。白く輝く甲冑。家臣は黒糸緘<sup>くろいとどし</sup>で統一した。

より「白」が目立つような工夫である。軍旗の図案である「白錦に金色の日輪、黒墨の五三桐」を具現化したものでもある。

国朝が跨るは、秀吉に拝謁した時に下賜された白馬の駿馬「五郎次<sup>ごろうじ</sup>」。

戦場で目立ち、見る者に勇気を与えるのが大将の役目と割り切った姿形であった。「見事な武者振りであります」

近侍の武田一郎右衛門が褒める。

「もともと大義名分もない無理筋の馬鹿げた戦じゃ。それを糊塗するために猿面冠者は私に目立ってほしいのであろうよ。せいぜいその通りに動いてやるさ」

そう呟いて、五郎次に跨る。そして、目深に兜を引き下げた。

曇天模様の空の下、王手門前の武者溜まりには、黒い甲冑姿の群れがひしめいていた。

国朝が姿を現すと、どよめきが走る。颯爽とした白い姿に誰もが心を奪われていた。これが、家康が言うところの「華」であろうか。

一段高い土塁の上から、国朝が一同を見下ろす。

「なんと凛々しい」

「輝くようなお姿、まるで神兵じゃ」

「さすが、清和源氏の血を引く貴公子」

そんな呟きが聞こえた。

嬉し涙を袖で拭っているのは、長く不遇をかこっていた古河公方系の古老たちである。

鎌倉の昔から続く名家に生まれながら、戦場に恵まれなかった無念が、彼らにはあった。それが、報われたのだ。

国朝がさっと右手を挙げる。

ざわめきはぴたりと止まり、轡の音すら消えた。

微風にそよぐ旗指物の音ばかりがこの場にあった。

国朝が一言、

「進発」

とだけ言うと、一陣の風が吹き抜け、古河公方下賜の軍旗がばさっと風にはためいた。

雲の隙間から陽が差し、前立てと軍旗の金箔貼りの日輪が、同時にギラリと光る。

まるで狙ったような演出だが、偶然である。これこそが、国朝が持って生まれた「華」というべきか。

この軍旗の意味を知っている坂東武者たちである、一気に士気があがった。

「えい！ えい！ 応！」

槍を突き上げて歓声を上げ、軍列が動き出す。

国朝と顔見知りになっている、近隣の農民が街道沿いに並んで、摘んだ野花を振りまいて、若き領主を祝福していた。

兜の眉庇<sup>まびさし</sup>で国朝の表情は読めないが、口元に微笑が走っているのを見て、沿道の者は感極まった。

子供たちが「殿様あ 殿様あ」と行列の後を国境まで追いかけてきていた。

この美しい「華」のある行列は、ゆく先々で参加の申し出があった。皆、戦に敗れて逼塞していた郷土たちで、槍・甲冑を物置から引っ張り出して駆けつけた者どもだった。

それほど、古河公方下賜の軍旗は坂東武者にとって重いもので、旧・鎌倉街道を辿っていることもあり、まさに「いざ鎌倉」であった。

国朝が鎌倉八幡宮に戦勝祈願に立ち寄った頃には、わずか五百余りの隊列は、数千にまで膨れ上がり、江戸、小田原を過ぎた頃には一万の軍勢に達していた。

この報告を受けて、ひっくり返るほど驚いたのは、近年体調がすぐれない秀吉であった。

西国のそれも百姓の出である彼は、東国の清和源氏の血筋に対する心の深い場所に刻まれた崇敬の念を軽く見ていたのである。



自らの死を予測していたらしい最高権力者である秀吉が、一族への継承を急ぐあまり、生来の非情さを見せる中、若き貴公子に何を思ったか、想像に難くない。

一説によると一万に膨れた軍勢が大坂通過の際、国朝が秀吉と面談したという記録は残っていないのも、なんとなく納得できる。

そして安芸国に軍列がさしかかったとき、国朝は急死する。病歴は無く、二十二歳という若さだった。

奇妙なことに、当時の現場の様子を伝える記録はない。「本当に病死だったのか？」と思ってしまうのは、勘ぐりすぎだろうか？

国朝によって作られた喜連川の基礎は、弟・頼氏に引き継がれ、何度か危機に見舞われながらも幕末まで続く。

わずか五千石の石高だが、十万石以上の大名の家格を認められ、江戸城における年賀など集まりでは、居並ぶ大大名を差し置いて、上座に座ったとされる。

まさに「華」のある藩だったのだ。